

修学旅行通信

実行委員長 小川 文太

こんにちは！修学旅行の実行委員長を務めます、小川文太です。

高校生活の中で最大のイベントのひとつ、修学旅行まで残り1ヶ月をきりました。クラスでは班別研修の計画や部屋割りなどが進み、期待が高まってきていることかと思えます。

この修学旅行は震災学習という大きな目的を有します。東日本大震災で甚大な被害を受けた東北に足を運ぶことで、“あの日”東北で何があったのか学ぼう、というものです。

ここで東日本大震災の被害状況を確認してみましょう。

津波の高さ 遡上高で40mに達する
総浸水面積 561km²
被害家屋 全壊124,685戸 半壊275,082戸
死者数 15,893 行方不明者数 2,572
被害額 約16兆9千億円

正直のところ、そう言われてもいまいちイメージがつかめませんよね(・・;))

数少ない機会を活かすためには、事前にある程度の知識を得ておくことが大切です。震災から4年半以上もの月日が過ぎ、当時のことを忘れかけている人もいるかもしれません。

そこで、今回の修学旅行通信では、私がこれまで活動してきた、笠間市の復興支援ボランティア事業『絆プロジェクト』の様子を通して、4年間の被災地の歩みと5年目の現状について少しでも知っていただきたいと思います。



(この写真は2年目のときのものです)

絆プロジェクトでは、震災直後の2011年から、笠間市岩間地区の中高生が宮城県の石巻市の河南東中学校、および西中学校との、また山元町の仮設住宅にて復興支援および交流活動を実施しました。

【1年目 瓦礫の山の残る街】



地震発生から日が経っていない1年目は、瓦礫の山や大きくえぐられた家屋が依然点在し津波の恐ろしさを静かに訴えていました。しかしそれ以上に印象強かったのは、更地と化してただただ広がる平地でした。仮設住宅では、津波に襲われたときとその後についてお話を聞きました。なにもかもを奪い去っていく自然の驚異には息をのむばかりでした。

【2年目 復興への歩み】



あの日から1年余り。このとき初めて津波被害を受けた市街地に入りました。辺りには、刈り取られたような基礎が残されるばかりでした。しかし、瓦礫の撤去が進み所々では改修工事も始まるなど、街や人は復興に向け一歩ずつ歩み出したことが感じられました。

【3年目・4年目 心の支援を】



月日が経つにつれ、物質的な支援から対話による心の支援へと切り替わったのがこのとき。石巻市の中学生との交流会や、仮設住宅とその周辺での花壇づくりや炊き出しといった活動をしました。別の街の人々の思いを直接聞くことができ、貴重な時間になりました。

【5年目の今、思うこと】

つい先月、5度目の宮城県に行って参りました。石巻の海沿いには大きな魚市場ができ、多くの人や車を見かけるなど、被災地は今もなお大きな復興をとげています。人の力もまた素晴らしいものだということを体感しました。

震災の風化。こんな言葉を見聞きするようになったのも、ずいぶん前のこと。それだけ人々の記憶からあの災害が薄れています。たくさんの命が犠牲となったあの日のことを、周囲の人、そして後世に伝えていける人になるために、現地の人とお話をするなどして積極的に活動し、実りある修学旅行にしましょう！！

